



楽日(不散 / Goodbye, Dragon Inn)

2007(平成19)年2月4日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督・脚本=蔡明亮 / 出演=陳湘琪 / 李康生 / 三田村恭伸 / 苗 天 / 石雋 / 陳昭榮 / 楊貴媚 (プレ
ンアッシュ配給 / 2003年台湾映画 / 82分)

……シネ・ヌーヴォが開催した「ツァイ・ミンリャン2003-5」により、1日で一挙に連続3本を。まずは、閉館日を迎えた台北の大きな映画館「福和大戲院」における人間模様の中、不思議な夢と現実の世界を描いたのが、この『楽日』(=最終日)。そこで上映される『龍門客棧』については、その学習が不可欠だが、邦画にも洋画にもない、何とも不可思議な蔡 明 亮の世界に魅了されること確実！

🎬 楽日とは……？

『楽日』は「らくじつ」ではなく、「らくび」と読まなければダメ。つまりこれは、大相撲という千秋楽と同じで、興行の期間の最後の日を意味する言葉。この『楽日』というタイトルどおり、この映画は台北にある「福和大戲院」という大きな古い映画館が舞台で、今日はその福和大戲院の楽日。映画の冒頭、この福和大戲院では『龍門客棧』(67年)が上映されているが、それは公開当初の時のようで、この大きな映画館が満席！しかし、それから数十年を経た今、楽日を迎える福和大戲院では同じ『龍門客棧』を上映しているが、観客はわずか数名……。

ちなみに『龍門客棧』は、1957年生まれの蔡 明 亮監督が10歳の頃に観た作品。そんな『龍門客棧』へのオマージュを、かつて華やかさを誇った映画館の楽日とそこに集まった数名の観客を通して見事に描いたのが、この映画。

🎬『龍門客棧』とは……？

日本人の私たちには全然わからないが、この『龍門客棧』という作品は「空前のヒット作」であり、「東南アジアの人々の心にやきつく名作」とのこと。パンフレットによれば、「当時、世界で最もヒットした映画は『風と共に去りぬ』（39年）の興行記録をはじめてやぶった『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）だったが、東南アジア圏にかぎっては、その『サウンド・オブ・ミュージック』も『龍門客棧』にかなわなかった」とのこと。そして、「この映画のあと、台湾でも武侠映画が大量につくられるようになり、映画産業の発展につながった」とのこと。

🎬かつての名俳優2人も

この『龍門客棧』という武侠映画には、①主役の武芸者を演じた石 雋^{シー・チュン}、②男装の女武芸者を演じた上官 靈鳳^{シャンクワン・リンファン}、③悪役の白髪^{バイ・イン}の宦官白鷹、④錦衣衛の隊長苗 天^{ミャオ・ティエン}、⑤悪役につけねられる忠臣の遺児徐 楓^{シー・フン}らが主役として登場した。そして「数カ月の教育を受けて出演した彼らまっさらの新人たちの運命がこの1作で決まり、以降、それぞれが映画界に確固たる地位を占め、活躍していった」とのこと。そんなエポックメイキングな作品である『龍門客棧』に主役として登場した石 雋^{シー・チュン}と苗 天^{ミャオ・ティエン}も、今は老人となっているのは当然。しかして、福和大戲院の楽日の今日上映されているかつての名作『龍門客棧』には、この石 雋^{シー・チュン}と苗 天^{ミャオ・ティエン}の2人が観客として客席に座ることに……。

🎬なぜか日本人の観客も1人

この映画には日本からも三田村恭伸が参加しているが、この俳優は日本では誰も知らないはず。だって、日本での俳優としての実績は何もないのだから……。そんな三田村^{ツァイ・ミンリヤン}と蔡 明 亮監督との出会いや、蔡 明 亮監督からのどのようなオファーで『楽日』に出演することになったのかは、パンフレットの中にある三田村のインタビュー記事の中で詳しく紹介されているのでそれを参照してもらいたいが、それは「ホンマかいな？」と思えるようなエピソードでいっぱい……。いかにも天才肌・直感的なフイーリングで物事を決断する蔡 明 亮監督^{ツァイ・ミンリヤン}の姿がそこに垣間見える……。彼が福和大戲院の中に入ったのは、映画を観るためよりは、むしろ降りしきる雨を逃れるた

め……？ したがって、観客が数名しかいない広い館内で、なぜか彼はこっちの席からあっちの席へ、さらにあっちの席からこっちの席へと挙動不審な動きを……？

うらぶれた映画館はゲイの巣窟

例によって、この『楽日』でも登場人物たちのセリフは極端に少ないが、観客同士の接点(?)はかなり多い。そのキーパーソンは美男子の陳昭榮^{チェン・チャオロン}。彼も何のためにこの福和大戲院の中に入ってきたのかよくわからないが、三田村との間でトイレの中や映画館の裏にある倉庫のような部屋の中で微妙なすれ違いを何度も……。こりゃ誰が見てもゲイが互いを呼び合うような行動だが……？

ちなみに、うらぶれた映画館がゲイの巣窟になっているのは、台湾でも日本でも同じ……？

幽霊のような謎の女性も

この福和大戲院の楽日の観客席に座る観客は、幽霊のような石雋^{シー・チュン}と苗天^{ミャオ・ティエン}の他、変な日本人やワケのわからない美男子など怪しげな男たちばかりだが、そんな中、紅一点として観客席に座るのが謎の美女、楊貴媚^{ヤン・クイメイ}。女のクセに(?)足を前の座席に投げ出し、ポリポリと音をたてて何かを食いながら、じっとスクリーンを見ている姿は異様で、こりゃどう見ても、「あちらの国」からやってきた幽霊……？

もちろん彼女もひと言もしゃべらないから、こんな役ならイモ女優でもできるのかと思うとそれは大まちがいで、やはり圧倒的な存在感を感じさせる力が必要。パンフレットを読んで彼女の輝かしい経歴も確認する必要あり！

主演はもぎりの女

以上のように、『龍門客棧』を上映している福和大戲院に集まっている観客は、奇妙な男たちや幽霊のような女ばかり数名だが、実は福和大戲院のもぎりの女がこの映画の主演。この主演を演ずるのが、『西瓜』(05年)で衝撃的なシーンを演じた美人女優、陳湘琪^{チェン・シャンチー}なのだが、この『楽日』では、ダサイロングスカートをはいた足の悪い、暗い女……。

彼女が演ずるのは、楽日を迎えた広い映画館の内外を見回り、トイレを清掃し、また映写技師の元にパン(?)を届け、映画が終了すれば戸締りをして、1人映画館を

出ていくというきわめて単純(?)な役……。足が悪いため歩くのがどうしても通常人より遅くなるのはやむをえないが、蔡明亮監督はそんな彼女の後ろ姿をロングショットで延々と……。そんな姿を観ながら、さてあなたは何を、どのように感じとるだろうか……？

リー・カンション 李康生の出番はごくわずかだが

蔡明亮監督の作品すべてに主演してきた李康生は、蔡明亮監督がこの『楽日』製作中に、初監督作品となる『迷子』を撮っていたため、出番を減らしてもらったとのこと。したがって、映写技師を演ずる彼の出番は、ラストの数シーンだけ。

社内恋愛や職場結婚が多いのは、職場であれば男女が自然に知り合う機会が多いうえ、仕事ぶりを通じてお互いの人間性がよくわかるため……。そういう意味では、福和大戲院の中で長年勤めてきた映写技師と、もぎりを長年続けてきた女が職場恋愛に陥っても不思議ではないのだが、この映画の暗い雰囲気はずっと馴れていると、そんな予測は全くできないのが当然。しかし実は……？

席を外している間に映写室へ届けられたパン(?)を見た彼は、急いでもぎり嬢のいる受付の部屋に駆けつけたが、既に彼女は雨の中を傘をさして外へ出て行ってしまった後。そこで彼はバイクを取り出したが、その後起こるであろう事態は一体どんなこと……。他方、楽日での最終上映を見終わったあの観客たちは、それぞれ一体どこへ……？

2007(平成19)年2月7日記